

## 紀州民家の防風雨装置及び屋敷構えの特性と変容

千森 督子

和歌山信愛女子短期大学

### The Evolution of Windbreaks and Ground Plans as Weather Protection in Folk Houses of the Kishu Area

Tokuko CHIMORI

*Wakayama Sin-ai Women's Junior College*

#### Summary

In Kishu (in Wakayama Prefecture and a part of Mie Prefecture), several measures have been taken to protect folk houses from strong rains and gusting winds during the typhoon season, which are common in that area. On the coast of the Kichu area (the central region of Kishu), people erect board fences, such as *amayokeita* and *sekiita* (protection boards), around their houses to protect them from the strong rains and winds. In the Kii Mountains, folk houses are enclosed with a low stonewall and low-ceiling main houses are surrounded by an annexed structure, which allows the buildings as a whole to protect themselves against winds. Other devices adopted are secured roofs and *tategu* (partitions attached to openings) and boards surrounding the edges of eaves and the area under the gables. Such boards in the Kii Mountains had already existed in the late modern period, while board fence erection in Kishu was established in the early Taisho Era at the latest. It has been shown that both were common until the 20s of the Showa Era. Although modern materials were introduced into the traditional wind-and-rain-breaks allowing further improvement in the 20s of the Showa Era, the need for such breaks decreased from the 30s onward. The main reasons pointed out are improvement in the water-and-air-tightness of *tategu* for external openings and reinforcement of the outside of houses and walls. There are peculiar reasons in the Kii Mountains and on the coast of Kichu respectively; in the former area, the change of roof shape into the one with a less exposed gable wall is an important factor, while in the latter, small eaves have developed into a substitute wind-and-rain-break. As a result, these external devices of folk house protection peculiar to Kishu no longer fulfilled a need.

**Keywords** : 民家, 台風, 暴風雨, 防風装置, 屋敷構え, 変容

*folk houses, typhoon, rainstorm, windbreak, ground plans, transformation*

#### 1. はじめに

##### (1) 紀州の伝統的民家にみられる防風雨装置と屋敷構え

紀伊半島は台風常襲地域であり、超大型台風による数々の災害史をもっている。近代以降の台風による被害

で特筆すべきは、明治22年(1889)と大正10年(1921)の台風、昭和以降では9年(1934)の室戸台風、25年のジェーン台風、34年の伊勢湾台風、36年の第二室戸台風などがある<sup>1) 2)</sup>。とりわけ被害が大きいのは、第二室戸台風で、瞬間最大風速は57メートル/秒<sup>3)</sup>にもおよび、災

害史に残る大災害を被った<sup>4)</sup>。他方、紀伊山地中央部には年間降水量が2,500mmを越える地域もあり、季節風などとも関係して、横殴りに吹き付ける雨風にも悩まされてきた。

このように風雨に配慮しなければいけない自然風土条件にあるために、紀州の伝統的民家には防風雨のための様々な工夫が施されてきたが、本項では紀州各地の防風雨装置と屋敷構えについて概観する。

紀北の和歌浦湾の断崖に集落を構成する雑賀崎では、冬季の季節風（オキヅキ）や台風時の風雨から家屋を守るための特徴的な工夫が民家にみられる。顕著なものは、下から吹き上げる風雨を塞ぐために備え付けられている軒天井である。軒天井は奈良県吉野郡でみられるような軒裏が水平のものではなく、斜めに構成されており、リアス式海岸の傾斜環境に建つ厳しい立地条件を物語っている（写真1）。屋根には瓦の飛翔防止のために漆喰押さえが施され、漁村であるために漁網を被せる対策も行われている<sup>5)</sup>。



写真1 雑賀崎の軒天井

一方、紀伊半島でも御坊市から志摩半島にかけての沿岸部や山中には、「マエダレイタ」、「マエイタ」、「オダレ」<sup>6)</sup>などと呼ばれる雨除け板を軒先に垂らして、風雨の吹き込みを防ぐ対策がみられる<sup>7)</sup>。日高川流域、熊野川・十津川流域、伊勢平野と吉野町付近の景観が最も特徴的



写真2 マエダレイタとセキイタ

であるとされている<sup>8)</sup>。

日高平野から日ノ御埼までの紀中沿岸部は、紀州灘沿岸でも最も海に突き出し、台風時には海岸から吹き付ける風雨がとりわけ強いために、マエダレイタだけでなく、「セキイタ」、「サシイタ」と呼ばれる<sup>9)</sup>装置を家屋の正面に建てる<sup>10)</sup>。下屋柱に沿って、あるいは支柱を建てて、その間に堰き板を入れて暴風雨を防ぐ造りである（写真2）。

装置でも、縁台が活用された地域がある。『川辺町史第二巻通史編下』<sup>11)</sup>には、「表座敷の外縁に蝶番で上向きにたためる縁台を取りつけ、夏は涼み台として使用し、強い吹き降りの時には、これをたたんで風雨除けにした家もあった。これは終戦後の新改築でほとんど姿を消した。」と記述されていることから、外部開口部の腰から下は縁台を代用して、風雨除けとした場合もあったようである（写真3）。



写真3 縁台

家屋に対してだけでなく、屋敷構えにも風雨に対する配慮が施されてきた。前述した紀北の雑賀崎集落はリアス式海岸の急峻な傾斜地に立地するために、集落は断崖に段状に構成されている。段状に構成される集落形態が一種の砦となり、密集した家屋が相互に補完し合い風を塞いでいる。昭和35年頃から55年頃にかけて、海岸部から西部丘陵地に立地している家屋が鉄筋コンクリート造へ変容し始め、60年代には上部の県道沿いにも鉄筋コンクリート造が広がる。集落の周辺部や尾根の風当たりの強い箇所では構造体の変化が著しくみられ、より強固な集落体制を造り出している<sup>12)</sup>。

紀中沿岸部には、屋敷林としてあせを植えたり、竹藪や柵木の垣根をめぐらす所もある<sup>13)</sup>が、とりわけ防風林が発達しているのは紀南の外洋に面した海岸地域である。マキ、ウバメガシなどの常緑樹の防風林である。他方、石垣も発達し、紀伊半島先端の潮岬から和深付近では軒高以上に達し、外洋に突出する岬端性を示している<sup>14)</sup>（写真4）。



写真4 紀伊半島先端の潮岬の石垣

## (2) 研究対象と目的

紀州各地の伝統的民家にみられる防風雨装置及び屋敷構えを捉えるなかで、風雨に対する対策が紀州でも地域により異なることが掌握された。そこで、本論文では、台風の勢力は上陸時に最も強いとされることから、台風常襲地域であり、紀州灘沿岸でも最も海に突き出した紀中沿岸部と、日本有数の多雨地域であり、風と絡まり横殴りに吹き付ける風雨が激しい紀伊山地の民家に視点を置き、家屋形態と防風雨装置、さらに屋敷構えの特性と変容を明らかにする。

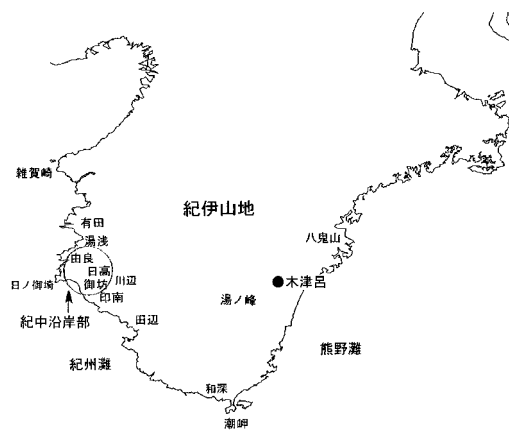
紀中沿岸部では、マエダレイタとセキイタの板囲いが集落景観としてまとまって分布する日高平野一帯を対象地域にする。対象とする13集落の大半が平地型の散居集落であるが、御坊市名田町の海岸段丘の集落が一部含まれる。対象家屋としては、変容事例をも含んだマエダレイタとセキイタをもつ27軒（表1、2、3）と直付けセキイタの事例20軒（3軒は表1の家屋と重複）（表4）、マエダレイタとセキイタをもたない家屋3軒（内1軒は表1の家屋の新築家屋）の合計47軒で、平成9年と16年、17年に調査を行った。対象家屋の建築年代は、江戸時代末期から明治時代が5軒、大正時代が6軒、昭和時代が25軒、平成時代が9軒、不明2軒である。

他方、紀伊山地ではひとつの集落を重点的に調査し、屋敷構成や家屋形態の特性と変容を明らかにする方法をとる。和歌山県と奈良県、三重県の県境に位置し、年間降水量が3,327mm<sup>15)</sup>と紀伊山地でも多い三重県南牟婁郡紀和町を対象地域とした。紀和町でも北山川沿いに位置する木津呂集落（元紀州藩領地）を選定し、平成11年に、集落の全戸28軒（内、空き家13軒）を対象に家屋調査と聞き取り調査を行った。つぎに、公営住宅と調査が不可能な家屋を除いた19軒を詳細に調査した（表5、6、7）。建築年代は江戸時代末期と推定される家屋が2軒、明治時代が10軒、明治から大正時代と推定される家屋が2軒、大正時代が1軒、昭和時代が3軒、平成時代が1軒であ

る。

研究方法としては、家屋の防風雨装置、外部構成要素、敷地状況に関する観察や実測と聞き取り調査より得られた資料から検討する方法をとる。

なお、本論文は、既往研究成果<sup>16)</sup>を防風雨装置と屋敷構えに焦点をあて、新たに得られた知見を加えて、ひとつつにまとめたものである。



地図1 調査対象地域

## 2. 紀中沿岸部の民家における防風雨装置の成立と普及

### (1) マエダレイタとセキイタの成立

紀中沿岸部の民家は、表、平側が軒出は深いものの、開口部に比して壁面が少ないために、気候風土上、防風雨策が必要となる。マエダレイタとセキイタは、①風雨の吹き込みを防止し、軒下への風の進入を防ぐ、②風圧を緩和し、建具の膨らみや離脱を防止し、外壁と開口部を風雨から守る役割を果たしている。

調査家屋のマエダレイタとセキイタの設置年代の上限を聞き取り調査から考察すると、家伝から明治時代に存在したとするものもあるが、確証が得られたのは大正時代初期である。日高郡日高町萩原に明治43年（1910）に生まれた笹本由子氏から、調査家屋の最古と考えられる同集落の上田恒和家住宅は、大正時代初期には両装置を備えていたことが明らかにされた。また、笹本由子氏の実家は当時、茅葺きであり、軒がかなり深く、両装置はなかった。日高郡由良町に明治40年（1907）に生まれた岡伝蔵氏からも、大正時代初期には両装置が備わった家屋が同家も含めて、同集落に実存し、茅葺き家屋では両装置がなかったことが聞き取れた。

そのために、両装置は瓦葺の普及とともに形成され、普及していったと考えられる。当地方の屋根材は、『印

南町史通史編下巻』<sup>17)</sup>によると、明治時代中頃に草から瓦に変化していったようである。『日高郡誌下巻』<sup>18)</sup>に記載されている、大正5年(1916)の屋根材の調査記録では、藁や茅の草葺きが19%であったのに対して、瓦葺きは77%を占めていたことから、大正時代初期には瓦葺きが普及していたことが明らかにされる。

一方、御坊市の大正10年(1921)の台風襲来後の町中の写真に、本瓦葺きの屋根にマエダレイタをもつ町家が写されていることから<sup>19)</sup>、大正時代中期には、マエダレイタが軒先に付けられていたことが、写真資料から裏付けられる。

セキイタの前身と考えられる、「トガキ」や「コモ」と呼ばれる薦が、第二次世界大戦後まで用いられていたことが、『美浜町史下巻』<sup>20)</sup>の記述や御坊市名田町の渋谷倫一大工、藪内啓三郎氏(大正13年生まれ)から明らかにされた。竹を二つ割りにしたものを両端と中央に配し、その間を「コグミ」と呼ばれる茅の様な草と麦で交互に編んだもので、戸口以外の前面平側の軒先に立て掛けて、縄で縛り風雨除けにした。しかし、強い風では飛ばされることもあったという。そのために、薦から板囲いに変化してセキイタが成立したのではないかと推測される。

(2) マエダレイタとセキイタの普及

調査家屋の大半はマエダレイタとセキイタを建築時に施設しているが、その下限は昭和32年である(表1・2)。そのために、普及期はそれ以前であると考えられるが、御坊市名田町の渋谷倫一大工や日高郡印南町の岡崎巖

氏、日高町萩原の西岡登良氏、日高郡由良町の小山伊太郎氏などの居住者の聞き取り調査から普及時期を検討すると、昭和20年代は大半の家屋に両装置が設置されていたが、30年代になり減少し始めたことが明らかになった。

これらの聞き取り調査結果と調査家屋の設置時期から、両装置は遅くとも大正時代初期には設置され、その後、昭和20年代まで施設されていたが、以降は減少傾向にあることが掌握される。

また、聞き取り調査と地域観察調査からマエダレイタの分布域は、北部は有田郡湯浅町、南部は田辺市切目付近、東部は紀伊山地に至る広範囲に及び、セキイタの分布域は、北部は有田市、南部は日高郡印南町、東部は旧日高郡川辺町(現日高郡日高川町西部)に至る一円に及んでいたことが把握された。

表2 セキイタ設置年代、場所

No.	主屋 建築年代	セキイタ 設置時期	セキイタ設置場所				
			上手側前部	オク前	オモテ前	土間口前	下手側前部
1	江戸末期~明治時代	不明(大正初期に実存)	Ⅱ型	Ⅱ型	Ⅱ型	無	無
2	江戸末期~明治時代	昭和10年頃	除去	除去	除去	無→直付け	無
3	明治時代	昭和22年頃	Ⅱ型→Ⅲ型	Ⅱ型→Ⅲ型	Ⅱ型→Ⅲ型	無	Ⅰ型
4	明治時代	不明	Ⅲ型	Ⅱ型	Ⅰ型	Ⅰ型	Ⅰ型
5	明治時代	昭和20年代	Ⅲ型	Ⅲ型	Ⅲ型	無	無
6	大正元年	大正10年頃	無	直付け(窓)	直付け(窓)	Ⅰ型	Ⅰ型
7	大正6年	昭和10年頃	Ⅲ型→除去	Ⅲ型→除去	無	無	無
8	大正中期	大正中期	無	Ⅰ型	Ⅰ型	無	無
9	大正10年	昭和30年頃	無	無→直付け	無→直付け	無	無
10	大正末期	大正末期	Ⅱ型	Ⅱ型	Ⅱ型	Ⅰ型	Ⅱ型・Ⅲ型
11	大正末期	大正末期	Ⅱ型	Ⅱ型	除去	Ⅰ型	Ⅰ型
12	昭和4年	昭和4年	Ⅲ型	Ⅲ型	Ⅲ型	Ⅰ型	無
13	昭和7年	昭和7年	無	無	Ⅰ型	Ⅰ型	Ⅲ型
14	昭和10年	昭和10年	除去	除去	除去	Ⅰ型	除去
15	昭和10年頃	昭和10年頃	Ⅲ型	Ⅱ型	除去	無	無
16	昭和10年頃	昭和30年頃	無	無	Ⅰ型	Ⅰ型	Ⅱ型・Ⅲ型
17	昭和12年	昭和12年	Ⅱ型→Ⅲ型	Ⅱ型→Ⅲ型	Ⅱ型→Ⅲ型	Ⅰ型	Ⅰ型・Ⅲ型
18	昭和20年代	昭和20年代	除去	除去	Ⅰ型	Ⅰ型	×
19	昭和20年代	昭和20年代	Ⅲ型	Ⅰ型	Ⅰ型	無	無
20	昭和27年	昭和27年	Ⅱ型→Ⅲ型	Ⅱ型→Ⅲ型	Ⅱ型→Ⅲ型	Ⅰ型	Ⅰ型
21	昭和30年	昭和30年	Ⅲ型	Ⅲ型	Ⅲ型	Ⅰ型	Ⅰ型
22	昭和31年	昭和31年	Ⅱ型	Ⅱ型	Ⅱ型	直付け	無
23	昭和31年頃	昭和31年頃	Ⅲ型	Ⅲ型	Ⅲ型	Ⅰ型	Ⅰ型
24	昭和32年	昭和32年	Ⅱ型	Ⅱ型	Ⅰ型	Ⅰ型	Ⅰ型
25	昭和32年頃	昭和32年頃	Ⅲ型	Ⅲ型	Ⅰ型	Ⅰ型	×
26	不明	不明	Ⅱ型	Ⅱ型	Ⅰ型	無	無
27	不明	不明	Ⅲ型	Ⅲ型	除去	Ⅰ型	Ⅰ型

芙蓉時期は表3に表示

表1 紀中沿岸部の調査家屋とマエダレイタ概要

No.	住所	主屋 建築年代	マエダレイタ 設置年代	入口 側	屋根			庇	マエダレイタ			
					方角	形態	材料		長さ	軒高	出	
1	日高郡日高町萩原	江戸末期~明治時代	不明(大正初期に実存)	平	南南西	入母屋	本瓦	有	無	53	282	160
2	日高郡由良町門前	江戸末期~明治時代	不明(昭和初期に実存)	平	南南東	入母屋	本瓦	有	無	×	261	152
3	日高郡日高町高家	明治時代	不明(大正末期に実存)	平	南	入母屋	本瓦	有	無	49	265	113
4	御坊市塩屋町北塩屋	明治時代	不明	平	南	入母屋	本瓦	無	無	41	260	144
5	日高郡由良町門前	明治時代	不明(昭和初期に実存)	平	南南東	入母屋	本瓦	無	無	45	234	145
6	日高郡日高町高家	大正元年	大正10年頃	平	南	入母屋	本瓦	有(後付)	無	41	270	122
7	日高郡由良町門前	大正6年	大正6年	平	南南西	入母屋	本瓦	無	無	48	258	156
8	御坊市塩屋町北塩屋	大正中期	大正中期	平	南	入母屋	棧瓦	無	無	46	259	154
9	日高郡日高町高家	大正10年	大正10年	平	南	入母屋	本瓦	無	無	52	286	132
10	日高郡日高町燕木	大正末期	大正末期	平	南南西	入母屋	本瓦	無	無	47	280	150
11	御坊市湯川町丸山	大正末期	大正末期	平	南	入母屋	本瓦	無	無	45	248	120
12	御坊市湯川町丸山	昭和4年	昭和4年	平	南	入母屋	本瓦	無	無	49	280	155
13	御坊市名田町橋井	昭和7年	昭和7年	平	南南東	入母屋	棧瓦	無	無	47	270	160
14	日高郡日高町高家	昭和10年	昭和10年	平	南	入母屋	本瓦	有(後付)	無	×	282	145
15	日高郡日高町萩原	昭和10年頃	昭和10年頃	平	南南西	入母屋	本瓦	無	無	48	267	150
16	日高郡印南町山口	昭和10年頃	昭和30年頃	平	南南西	入母屋	本瓦	有	有(後付)	59	275	153
17	日高郡日高町高家	昭和12年	昭和12年	平	南	入母屋	本瓦	有	無	42	285	150
18	御坊市塩屋町北塩屋	昭和20年代	昭和20年代	平	南	入母屋	本瓦	有(後付)	無	50	280	147
19	御坊市名田町橋井	昭和20年代	昭和20年代	平	南	入母屋	棧瓦	無	無	51	273	160
20	日高郡印南町山口	昭和27年	昭和27年	平	南南東	入母屋	本瓦	有	無	58	290	154
21	御坊市湯川町財部	昭和30年	昭和30年	平	南	入母屋	本瓦	有	無	47	227	140
22	日高郡日高町萩原	昭和31年	昭和31年	平	南南西	入母屋	本瓦	有	無	50	308	150
23	日高郡日高町高家	昭和31年	昭和37年頃	平	南	入母屋	本瓦	無	無	50	300	150
24	日高郡日高町志賀	昭和32年	昭和32年	平	南東	入母屋	本瓦	無	無	41	290	147
25	御坊市名田町橋井	昭和32年	無	平	南南東	入母屋	本瓦	有	有(後付)	無	245	130
26	日高郡日高町志賀	不明	不明	平	南	入母屋	本瓦	無	無	51	263	129
27	日高郡日高町萩原	不明	不明	平	南南西	入母屋	本瓦	無	無	44	260	140

×は撤去

### 3. 紀中沿岸部の民家におけるセキイタの特性

防風雨装置でもアマヨケイタに関しては、5節の紀伊山地の板囲いの考察の中で比較しながら捉えとし、ここではセキイタのみについて取り上げる。

セキイタは、造りや形態を考慮して分類すると、①日常的に外されているもの、②常設のもの、に大別され、さらに、②は取り外し可能なものと、固定されているものに区分される。①の厚板をはめていくものをⅠ型、②のパネル化され、取り外し可能なものをⅡ型、固定されて堀的な意匠になっているものをⅢ型とする。

主屋の間取り形式は通り土間形式で、右勝手が多く、表に面する居室は上手座敷の「オク」と、下手土間側の「オモテ」、または「デー」、「デ」と呼ばれる2室で、縁側はなく、直接居室が配される。セキイタ設置箇所は、上手壁面の閉鎖部前、床上開口部（オクとオモテ）前、土間口前、下手壁面閉鎖部前に分類される。これらのすべての箇所を覆う完全防雨形態をとるものと、部分的に設

置されるものがあるが、表2から、床上開口部前に多く設置されていることがわかる。

Ⅰ型が一般化しているのは、日常的に開放性を必要とする土間口前である。床上開口部前では下手のオモテ前に設置されるものが多い（写真5）。Ⅱ型は土間口より上手に設けられ、特にオモテの前面が多い。常設されているが、150～180cm間隔の柱の間にパネルを嵌め、上部を貫て納める形式である。結婚式や葬式時にはパネルをはずし、座敷前面を開放する（写真6）。Ⅲ型は出入りの必要性のない下手や上手の壁や戸袋前に主に用いられる（写真7）。つぎに多いのがオクの居室前である。冠婚葬祭を住まいで行わなくなる昭和40年代以降になると、固定式のⅢ型に変更されるものもある。

単独の型ばかりが用いられるのではなく、なかには3種の型が組み合わされた構成がある（図1）。また、Ⅱ型、Ⅲ型は高さが150cm程度であるが、台風時にはさらに出桁との間にセキイタを落とし込み、前面を完全に覆う造りもみられる。



柱の間にセキイタを入れる



途中まではめ込んだ状態

写真5 Ⅰ型セキイタ



写真6 Ⅱ型セキイタ



写真7 Ⅲ型セキイタ

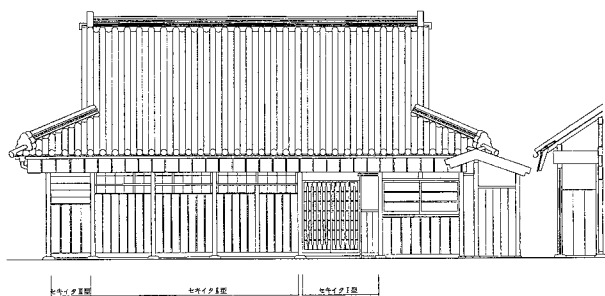


図1 マエダレイタとセキイタI型・II型・III型

#### 4. 紀中沿岸部の民家における防風雨装置の変容過程

つぎに、調査家屋の分析から両装置の変容過程を考察する。

##### (1) 継承と消失の重複

昭和30年代にはマエダレイタとセキイタが減退する傾向が把握されたが、30年代初頭に同じ大工により建てられた農家住宅で、両装置の継承に関して対照的な事例が日高町萩原にある。両者を比較、検討しながら防風雨装置の変容過程の考察を進める。

日高町萩原は日高平野北部の山裾に位置する散居集落で、西岡千恵子家は集落のほぼ中央部に位置する。同家は建て替える以前の家屋には両装置が設置され、昭和31年建築の家屋にも継承されていた。

継承要因として、敷地条件がまず、考えられる。台風時に風当たりの強い南側は田で、近隣には家屋などの建築物が少なく、周辺環境で風を塞ぐ効果があるのは南側のブロック塀のみである。敷地内には「カド」と呼ばれる農作業用の庭が広くとられ、家屋には防風雨対策がとりわけ必要とされる。他方、湿潤な地質のために家屋の床高は72cmと高く、それに呼応して軒先高も308cmと調

査家屋のなかではかなり高い。居住者は前方の遮蔽要素の少なさや軒高を苦慮し、軒出は150cmと深いものの、これらの防風雨装置の必要性を強く認識している。昭和57年にアルミサッシ戸に変更されるが、雨戸、マエダレイタ、セキイタは残される(写真8左)。

他方、西岡千恵子家住宅の近接地に位置する、西岡登良家は明治時代初期に建築された前家屋には両装置は設けられていたが、昭和32年建築の現家屋には設置されていない。

当家も湿潤な地質のために、床高は72cm、軒先高も322cmと高いが、敷地周辺の家屋状況が異なる。家屋が密集し、風当たりの強い東、南側が前方の建物で遮蔽されている。このような敷地条件が装備の除去を促したと考えられるが、主要因は居住者の住要求にある。前住宅がマエダレイタとセキイタのために圧迫感が強く、室内が暗かったために、新築家屋には両装置を取り除きたいという居住者の要望が強く反映されている。

両装置を継承しないが、それに代わる風雨への新たな工夫が家屋に施されている。開口部は障子ではなく、ガラス戸と雨戸の構成になっている。軒出は140cmと深く、室内への雨の降り込みの緩衝地帯となる縁側が設置されている。張り出した玄関の屋根には、雨の降り込みを緩和するために、小庇が廻されている。また、屋根は入母屋形式で庇を持たない伝統的な形態であるが、瓦が飛びやすい棟瓦と軒瓦を漆喰で止める対策が施されている。

建築後の昭和34年の伊勢湾台風と36年の第二室戸台風の超大型台風襲来時には、瓦が5～6枚飛んだが、居住者は安全面への不安はなかったとしている(写真8右)。

対照的な事例を取り上げたが、継承には敷地周辺の家屋状況との関わりも指摘されるが、居住者の前住宅に関する住意識や自然災害の体験、住要求などが左右している。継承される場合は伝統的な装置や家屋形態を肯定し、継承されない場合は両装置の問題点の改善志向が強く、



継承事例



継承しない事例

写真8 マエダレイタとセキイタの継承

家屋には装置に替わる新たな工夫が施されていく。昭和30年代には、雨の降り込みを緩和できる縁側が設置されるようになり、外部開口部にはガラス戸が普及し、小庇が設けられるなどの対策が施されるようになる。さらに、屋根瓦の飛翔防止策などが図られていく。

## (2) 再生と変容

昭和30年代には、両装置を設置しない家屋がみられるようになるが、一方、建築後に後付けされる流れがある。後付け事例は、表3に示すように、昭和30年代に集中している。建築時には採光の理由などから両装置を設けていないが、前述の西岡登良家とは対照的に、昭和25年のジェーン台風と34年の伊勢湾台風、36年の第二室戸台風の体験後に設置している。後付けされた家屋は瓦が飛ぶ程度で、大きな破損を受けることはなかったが、雨戸を家の中から必死で押さえた経験から装置の必要性を再認識し、設けることになった。

昭和30年代後半に後付けされたセキイタでは、室内への採光が考慮された、ガラス窓の付いたⅢ型セキイタも



写真9 ガラス窓の付いたⅢ型セキイタ

みられる(写真9)。ガラス窓の普及はセキイタにも及ぶようになる。そのために、伝統的に築かれてきた装置は単純にはなくならずに、大きな災害後には改善策が加えられて、再設置される過程を辿る。

他方、昭和40年代後半以降には、既設の両装置の材料が変化していく。両装置は木製であるために数十年単位で更新が必要であるが、腐朽しにくいトタンに改変される傾向がある。

## (3) 消長

### 1) 既存の装置の撤去

再生事例の出現や改善策が生み出されるなど、変容しながらも継承される流れがあるが、後付けされるのは、昭和30年代までで、40年代半ば以降になると、既存の装置が撤去されていく。撤去理由としては採光や通風面の支障、セキイタでは圧迫感も指摘されている。

マエダレイタの撤去は屋根の葺き替え時に併行して行われるが、セキイタは建具がガラス戸やアルミサッシ戸に変更される時か、その数年後に撤去される傾向があり、建具材の改変が関係している。また、両装置同時に撤去する場合は少なく、片方の装置を残しながら行われる。セキイタは圧迫感が強いいためか、セキイタの方が先に撤去される傾向にある。しかし、セキイタの撤去過程は、一度にすべてを撤去するのではなく、部分撤去の過程から行われる。部分撤去は昭和45年に始まり、開放性を必要とするオモテ前から行われる(写真10)(図2)。全面撤去は、昭和50年代以降にみられ、半数は撤去後に土間口にⅠ型や直付けセキイタを設置している。これらの変容は、セキイタを必要とする箇所の変化を意味しているが、この点に関しては次項で詳しくみていきたい。

表3 マエダレイタ・セキイタ変容事例

マエダレイタ		セキイタ		理由	
No.	変容時期	変容事項	変容時期	変容事項	
2			昭和初期	後付け(Ⅲ型)	風雨除け
5			昭和20年代	後付け(Ⅲ型)	風雨除け
3			昭和22年頃	後付け(Ⅱ型)	風雨除け
16	昭和30年頃	ジェーン台風後	昭和30年頃	後付け(Ⅰ型)	風雨除け
9			昭和30年頃	後付け(直付け)	風雨除け
22	昭和37年頃	第二室戸台風後	昭和37年頃	後付け(Ⅰ型・Ⅲ型)	風雨除け
24			昭和37年頃	後付け(Ⅰ型・Ⅲ型)	風雨除け
3			昭和40年頃	変更(Ⅱ型からⅢ型へ)	取り外し減少のため
25	昭和45年	ガラス戸変更時	昭和45年	材料変化(板→トタン)	老朽のため
11			昭和45年頃	ガラス戸変更後	部分撤去(オモテ前面)
7			昭和50年頃	ガラス戸変更時	全面撤去
15			昭和50年頃	ガラス戸変更後	部分撤去(オモテ前面)
20			昭和50年頃	変更(Ⅱ型からⅢ型へ)	取り外し減少のため
2	昭和48年頃	屋根葺き替え時	平成8年	アルミサッシ戸変更時	全面撤去後、戸口に直付け
4	昭和55年		昭和55年頃	材料変化(板→トタン)	採光・通風のため
21			昭和57年頃	アルミサッシ戸変更時	戸口に直付け
17			昭和64年頃	変更(Ⅱ型からⅢ型へ)	取り外し減少のため
14	平成5年	縁増設・アルミサッシ戸変更時	平成5年	縁増設・アルミサッシ戸変更時	全面撤去後、戸口前Ⅰ型設置
18	平成5年	屋根葺き替え・アルミサッシ戸変更時	平成5年	屋根葺き替え・アルミサッシ戸変更時	床部分撤去
26			不明	部分撤去(オモテ前面)	マエダレイタは伝統上踏襲 採光・通風のため

Noは表1、表2のNoと対応し、同一家屋である。



オモテ前面撤去



トタン張りに改変

写真10 セキイタ撤去、改造例

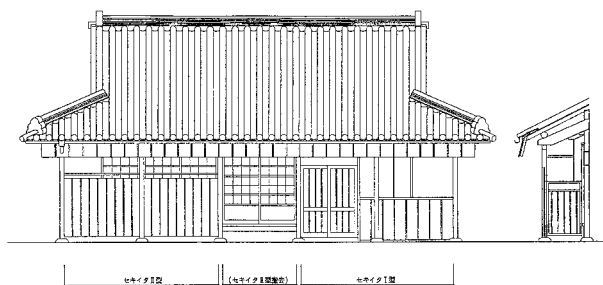


図2 セキイタ撤去事例

## 2) マエダレイタの消滅とセキイタの変容

マエダレイタは形態的な改善や変容は行われなく、昭和40年代の新築住宅では表4に示すように設けられなくなっていく。マエダレイタの消滅は、前項で考察したように、外部開口部の建具が障子と雨戸の組み合わせからガラス戸と雨戸の組み合わせに変化したことと、採光の妨げにならず、降り込みが緩和できる小庇の普及との関係性が考えられる。以降はマエダレイタに代わり軒下に庇を重ねる屋根形態が普及していく。

さらに、マエダレイタの消滅は外装の変化と呼応していく。伝統的な家屋では外壁部分も防風雨への工夫が施され、妻側は土壁で閉鎖され、外部仕上げは降水に強いように羽目板がほぼ内法高まで張られ、上部は大壁である。マエダレイタのある平側の外壁面は、下部は羽目板張り、上部が真壁の構成であるが、マエダレイタを用いなくなると、下部は高羽目板張りで上部は大壁で構成されるようになる(写真11)。

他方、セキイタは形態や設置場所が変化しながらも継承されていく。変化点を整理すると、①前面全体を覆う形態が少なくなり、開口部だけに設けられる、②家屋から分離、独立していた従来の型が減少し、直付けセキイタが一般化する、である。これらの変容は、建具の変化や外装の変化だけでなく、軒出の縮小といった建築的な変化とも相互に作用し合っていると考えられる。風雨に対する装置が軒下に板を建てる形態から、軒出を縮小して、平側開口部に直に板を建てる形へと変化したことを示している。



高羽目板張り・大壁



小庇

写真11 新たな外部構成要素をもつ住宅



### 3) 直付けセキイタの普及

小窓に用いられていた直付けセキイタが、昭和40年代以降に前面開口部に普及していくが、直付けセキイタは、開口部の外側に直接枠を嵌め、板を落とし込むI型の変形である。雨戸のある場合は雨戸の外側に板を落とし込む(写真12)。木製枠は水で膨らみ、気密性が高くなる利点があるが、昭和50年代半ば以降はアルミサッシ枠が

主体になる(表4)。

直付けセキイタは、装着が容易で、場所をとらず、日照や通風の妨げにならないために、普及箇所は掃き出し開口部、窓、玄関口と前面開口部全体に及ぶが、掃き出し開口部の直付けセキイタは、昭和40年代以降のアルミサッシ戸と雨戸の組み合わせにより、減少する。

他方、板戸を併設しないガラス戸やアルミサッシ戸の



写真12 直付けセキイタ 1 (掃き出し部)



玄関直付セキイタ枠

鉄筋コンクリート造窓

写真13 直付けセキイタ 2

表4 直付けセキイタ調査家屋概要

No.	セキイタ設置年	主屋建築年	セキイタ設置場所	セキイタ枠材	構造	平側外壁外装	屋根形式	屋根瓦	小庇	マエダレイタ	階高
1	昭和30年	大正10年	掃き出し	鉄製枠	木造	下見板張り・真壁	入母屋	本瓦	無	有	1
2	昭和40年	昭和40年	掃き出し	木製枠	木造	高羽目板張り・上部大壁	入母屋	本瓦	有	無	1
3	昭和43年	昭和43年	窓	鉄製枠	RC造		陸屋根		有	無	2
4	昭和48年	昭和48年	玄関・窓(1階・2階)	アルミ製枠	木造	高羽目板張り・上部大壁	入母屋	本瓦	有	無	1
5	昭和50年頃	昭和50年頃	玄関・窓	木製枠	木造	高羽目板張り・上部大壁	入母屋	本瓦	有	無	1
6	昭和50年頃	昭和50年頃	玄関・窓	木製枠	木造	高羽目板張り・上部大壁	入母屋	本瓦	有	無	1
7	昭和55年	昭和55年	掃き出し(2階)	アルミ製枠	RC造		陸屋根		無	無	2
8	昭和57年	昭和32年	玄関	アルミ製枠	木造	下見板張り・真壁	入母屋	本瓦	無	有	1
9	昭和58年	昭和58年	玄関	アルミ製枠	木造	高羽目板張り・上部大壁	入母屋	本瓦	有	無	1
10	昭和63年	昭和63年	玄関	アルミ製枠	木造	高羽目板張り・上部大壁	入母屋	本瓦	有	無	1
11	平成元年	平成元年	玄関・窓(1階・2階)	アルミ製枠	木造	高羽目板張り・上部大壁	入母屋	本瓦	有	無	2
12	平成4年	昭和22年	玄関	アルミ製枠	木造	下見板張り・真壁	入母屋	本瓦	無	有	1
13	平成6年	平成6年	玄関	木製枠	木造	高羽目板張り・上部大壁	入母屋	本瓦	有	無	1
14	平成6年	平成6年	玄関・掃き出し・窓(2階)	木製枠	木造	高羽目板張り・上部大壁	入母屋	本瓦	有	無	2
15	平成6年	平成6年	玄関	アルミ製枠	木造	高羽目板張り・上部大壁	入母屋	棧瓦	有	無	2
16	平成6年	平成6年	玄関	木製枠	木造	高羽目板張り・上部大壁	入母屋	棧瓦	有	無	1
17	平成7年	平成7年	玄関	木製枠	木造	高羽目板張り・上部大壁	入母屋	本瓦	有	無	1
18	平成8年	平成8年	玄関	アルミ製枠	木造	高羽目板張り・上部大壁	入母屋	本瓦	有	無	2
19	平成8年	平成8年	玄関	アルミ製枠	木造	高羽目板張り・上部大壁	入母屋	本瓦	有	無	2
20	平成8年	江戸末期~明治時代	玄関	アルミ製枠	木造	下見板張り・真壁	入母屋	本瓦	無	無(撤去)	1



写真14 防風雨装置設置主屋と新たな外部構成要素からなる隠居所

みの玄関の開口部の構成が定着するにつれ、玄関に直付けセキイタが普及する傾向がある。台風時の瓦等の飛来によるガラス破碎防止と風圧緩和のためである。

直付けセキイタは、木造以外の鉄筋コンクリート造にも普及していく。鉄筋コンクリート造では、開口部に雨戸を併設しない場合が多いため、玄関だけでなく、窓にも設置される(写真13)。

#### 4) 防風雨装置衰退の兆し

昭和50年代後半には、入口の建具が鋼製の開き戸になり、直付けセキイタを必要としなくなる事例がみられる。御坊市湯川町の藪内啓三郎家住宅は、昭和30年建築の主屋には伝統的な板囲いを設けている。一方、隣接する昭和58年建築の隠居屋は、在来工法の木造であるが、入口の建具は開き戸の鋼製のドアになり、掃き出し開口部はアルミサッシュ戸と雨戸の構成である。直付けセキイタの必要性がなくなり、掃き出し開口部は、小庇と軒瓦を釘止めする対策や、雨戸敷居の排水溝で対処している(写真14)。

さらに、小庇や風雨に強い本瓦葺きの屋根材などの地域的な防風雨策も姿を消していく兆しがみられる。

前述の昭和31年に防風雨装置を継承して建築された、西岡千恵子家住宅は平成12年に再々建されている。当主が次世代になり、伝統的な在来木造工法の住宅ではなく、プレハブメーカーの木質系の規格品で建築している。2階建てで、屋根材も瓦ではなく、玄関は開き戸の鋼製のドア、掃き出し開口部はアルミサッシュ戸とシャッターの構成である。風当たりの強さだけでなく、雨の降り込みを認識していたので、規格品のなかでも庇をもつ形態を選定したが、降り込み防止効果はないようである。

西岡家では、防風雨策の必要性を意識しながらも、伝統的な建築を手がける大工減少や施工に伴う居住者の手間の合理性などの理由からプレハブ住宅とした。御坊市ではプレハブメーカーがバブル景気の頃から進出し始め、居住者の業者選定方法や住宅建築に関する意識に変化がみられる。



図3 本宮湯峰入湯客屋

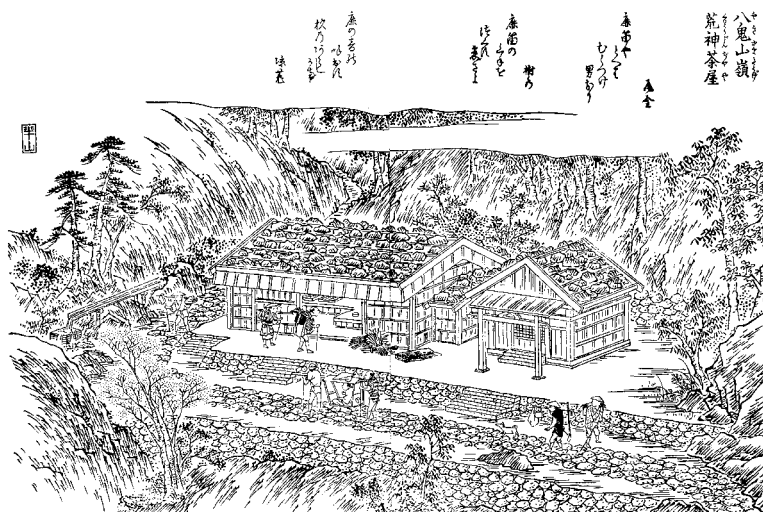


図4 八鬼山嶺荒神茶屋

## 5. 紀伊山地の民家にみる屋敷構えと家屋形態及び防風雨装置

紀伊山地の山間部は降水量が多く、日本有数の多雨地域である。風と絡まり横殴りに吹き付ける風雨から家屋を守るために、雨除け板が発達した地域である。

文献で歴史的に防風雨策を探ってみると、近世後期に出版された、『西国三十三所名所図会』<sup>21)</sup>に掲載されている、熊野地方の間越嶺の民家や小雲鳥坂の桜茶屋、本宮湯峰温泉の入湯客屋(図3)、八鬼山嶺の荒神茶屋(図4)の家屋は板葺き屋根で、屋根には多数の石が置かれ、外壁も板壁であることから風雨に備えた造りになっていたことがわかる。さらに、本宮温泉の客屋や八鬼山嶺の荒神茶屋では軒先に板囲いが付けられていることから、19世紀中頃にはすでに防風雨装置が生み出されていたことが把握される。

本節では、紀伊山地の中央部に位置する三重県南牟婁郡木津呂集落の民家の屋敷構えと防風雨装置の特性と変容について検討する。

### (1) 屋敷構え

木津呂集落は、北山川沿いの緩勾配地に立地しているために台風襲来時には川の氾濫により浸水の被害を受けやすいだけでなく<sup>22)</sup>、川から吹き上げる風が強く、屋敷構えには風雨から屋敷や家屋を守るための様々な工夫が施されている。

敷地は大半が100坪を越える広さで、北山川に並行に横長に設けられるものが多いが、図5のように、傾斜地を含みながら上下に構成される敷地もある。各家は土盛

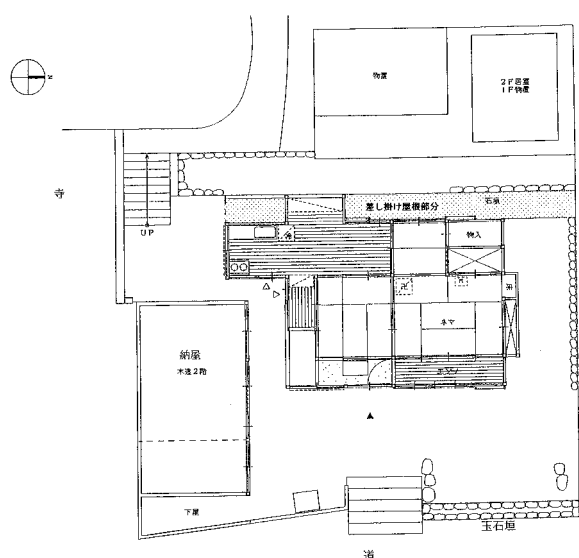


図5 紀伊山地の民家の屋敷配置

りした上に屋敷を築いているが、屋敷の擁壁には北山川の河原の玉石が積まれている。

戦前までの家屋では、風除けも兼ねて、屋敷の前面から両側には幅60～80cm、高さ1m位の石垣が築かれている(写真15)。石垣は野石のままの乱積みで、摩擦と重力で安易に崩れないようにした空積みである。



写真15 玉石による擁壁と主屋外観

主屋は敷地前面を空けて、敷地後背部の山肌に寄り添うように配されている。主屋後背部には石垣による擁壁が控えているが、擁壁の高さは2m足らずで、主屋との間隔は1～2m程である。屋根の軒端を、あるいは差し掛け屋根を擁壁まで伸ばして、風の吹き込みを塞ぐ工夫が施されている。主屋上手の石垣との間も同じ位の距離にあり、同様に差し掛け屋根を渡して閉塞させている家屋がある。内部は多くが物置として活用されている(写真16)。

主屋は、明治時代末期から大正時代頃に建築された筏師のための舟宿と平成元年に改築された2軒だけが2階屋であるが、その他は平屋である。主屋の下手、あるいは前面には、納屋が塀沿いに配され、主屋の風除けになっている。主屋と納屋の間隔は1～2m程で近接しているが、風の吹き込みを防ぐ効果が考えられる(表5)。そのために、伝統的な屋敷は石垣で囲われるだけでなく、石垣と主屋、付属屋が各々、風に対して補完しあうように配置されている。

このような屋敷構成も、昭和20年代末期以降に建築された家屋では変化していく。塀の石がモルタルで固められたり、コンクリートブロック造となり、差し掛け屋根を設ける造りもなくなる。

一方、家屋構成も変化していくが、とりわけ、納屋が2階建に変化していく。納屋が2階屋に変化するのは生活空間の拡大のためであり、2階屋では、1階に納屋や衛生空間、2階には若夫婦の居室や子供部屋、隠居所などの居住空間が設けられている。

そのために、各建物の独立性が強くなり、家屋の軒高



正面

後背部

写真16 石垣と主屋の取り合い

を低く抑えて風への抵抗を少なくしてきた屋敷構成も変化していく傾向がある。

表5 紀伊山地の調査家屋の屋敷構成

No.	敷地周囲 前/横/後	付属屋	塀と建物間の閉塞 場所
1	石垣/石垣/石垣	2階建納屋 (納屋・便所) (昭和30年頃) /物置/浴室	主壁後
2	石垣/石垣/石垣	納屋/牛小屋/便所/浴室	主壁後
3	石垣/石垣/石垣	納屋・便所・風呂/隠れ	無
4	石垣/石垣/石垣	2階建納屋 (納屋・便所・風呂) (昭和20年頃) /薪小屋/草納屋	主壁上手・後
5	石垣/石垣/石垣	飯屋・薪小屋/南付物置屋/道具小屋/焚き物入れ /2階建納屋 (平成8年頃) /車庫	主壁後 納屋後
6	石垣→ブロック塀	納屋/納戸/物置・物置・便所・風呂/部屋	主壁後
7	植栽・石垣/石垣/石垣	2階建納屋/便所・浴室	主壁上手・後
8	無/石垣/石垣	納屋/物置・便所/風呂	無
9	植栽・石垣/石垣/石垣	納屋・便所・風呂/物置	主壁後 納屋後
10	石垣/石垣/石垣	物置/土蔵	無
11	石垣→ブロック塀	2階建納屋 (明治時代)	主壁後
12	石垣/石垣/石垣	納屋/薪小屋/物置・便所・風呂	主壁上手・後
13	無/無/石垣	納屋	無
14	植栽・石垣/石垣/石垣	2階建納屋 (昭和初期頃) /薪小屋/物置/便所・風呂	主壁上手・後 納屋後
15	石垣・ブロック塀/石垣・ブロック塀/石垣	2階建納屋 (昭和45年) /物置/隠れ	主壁後
16	ブロック塀/ブロック塀/石垣	納屋/車庫/2階建隠れ (昭和34年) /小屋	無
17	石垣/石垣/石垣	2階建納屋 (納屋・便所・風呂・部屋) (昭和35年) /車庫/肥料入れ	無
18	ブロック塀/ブロック塀/ブロック塀	倉庫/薪付物置/車庫	無
19	無/ブロック塀・石垣/無	納屋/物置・便所・風呂/木小屋/部屋	無

( )は2階建納屋建築時期

## (2) 家屋形態と防風雨装置の特性と変容

紀伊山地特有の横なぐりの雨や台風の風雨から家屋を守るために、家屋には防風雨策が施されている。江戸時代から明治時代に建築された家屋の屋根は、簡潔な切妻屋根の杉皮葺きであったが、軽い屋根材が飛散するのを防止するために、割った孟宗竹を押さえ棧にして、その

上に石を置いた。また、台風時には綱の先端に石を付けて重しとし、屋根を押さえる方法がとられたが、このような方法をとることを「イエをヒカエル」といった。その後、石とワイヤーを併設する時期があるが、戦後になり杉皮葺きからトタン葺きに変化していくなかで石置き屋根は姿を消していく。トタン葺き屋根では押さえ棧を設置したり、ワイヤーを掛け、その両端をチェーンでつなぎ、地面に打ち込んだ金具で固定する対策が行われるようになる。現在も一部の家屋では継承されている(写真17)。大正時代以降になり瓦屋根が普及していく。瓦屋根では小庇を重ねるものもあるが、特別な防風雨対策が施されていないものが多い(表6)。

外壁は降水により洗い流される心配のない板壁で構成されている。切妻屋根では妻壁が大きく露出するために、降水が外壁にかかりにくいように、大半の家屋では棟を外壁面より50cm程突き出し、「ガンギ」と呼ばれる伝統



写真17 トタン屋根の押さえ棧とワイヤー



写真18 主屋の雨除け板

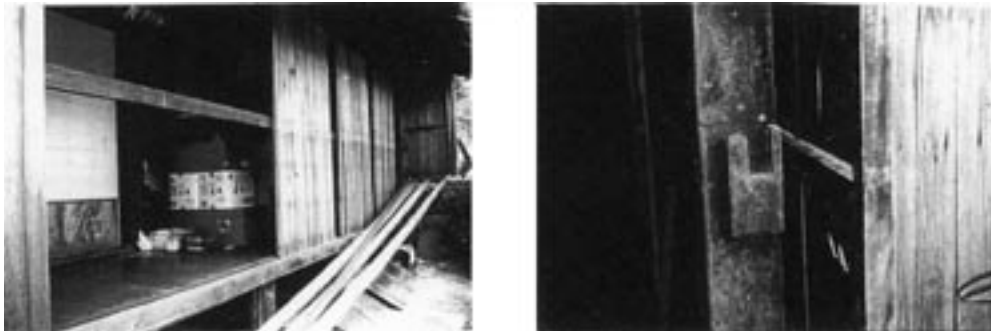


写真19 雨戸の門と門受け

的な板囲いを破風（「ハフ」と呼ばれている。）下に垂らしている（写真18）。妻側だけでなく、開口部の占める割合の高い平側の軒先にも調査家屋の1/4で板囲いが設けられている。

吹き込みは軒先下端の高さと、板囲いの長さとお壁面との距離に関係すると考えられるが、紀中沿岸部と比較しながら、特性を検討する（表1・6）。

軒出は62～104cm（平均86cm）と紀中沿岸部と比べて60cm以上浅く、軒先下端までの高さは225～313cm（平均260cm）で、紀中沿岸部より10cm以上低い。縦板の長さは、紀伊山地では20～53cm（平均40cm）で、紀中沿岸部の平均値と比べて7cm程短い。さらに、中央部は5～10cm位短くなり、居室開口部への採光が考慮されている（写真18）。文献資料<sup>23)</sup>と比較すると、紀伊半島における縦板の平均値な長さで、外壁面との距離も平均値であることから、むしろ、紀中沿岸部に縦板が長く、軒出が深い地域特性が把握される。

風の吹き上げを防止するための軒天井を設けた家屋も1軒あり、緩勾配地に立地する敷地条件が反映されている。

雨戸敷居には多量の降水を処理する排水溝が空けられている。台風時には雨戸に門（呼称は「カンヌキ」や「アマドバシラ」）を内外より嵌めて外れないようにする。門受けは、木製あるいは鉄製で、両側の柱に取り付けられている（写真19）。

これらの伝統的な家屋形態や防風雨策も、昭和20年代以降になり変化していく。まず、装置や家屋の材料が変化する。ガンギなどの板囲いの約半数がトタンに更新されている。既存の板壁も昭和40年頃からトタンが貼られる傾向がある。他方、昭和20年代末期以降に建築された家屋では壁は土壁となり、平成時代以降では新建材も用いられるようになり、屋根、壁共に地域的な特性が失われていく（表6）。

また、昭和20年代末期以降に建築された家屋には、当初から板囲いは設けられていない。その要因は、屋根形式と開口部の建具材の変化にある。屋根形式は妻壁が大きく露出しない入母屋形式や寄棟形式になるために、ガンギは不要となる。入母屋屋根では破風下の妻壁が板やトタン張りになる。平側では、開口部の建具にガラス戸が用いられるようになるために、吹き込みの心配もなく

なり、板囲いの必要性も低下する(表7)。

さらに、昭和50年代後半から60年代には、アルミサッシ戸に変化する過程で門を用いなくなる。門受けは、かつて、半数の家屋に設置されていたが、取り外されたものも多く、現在は調査家屋の1/3になっている。

## 6. まとめ

紀州の民家は、自然風土条件、なかでも台風による風雨や横殴りに吹き付ける降水に対していかに備えるか、といったことに主眼が置かれ、家屋や屋敷構えにさまざまな工夫が施されてきた。紀州でも地域により地形や自然条件が異なり対応策にも違いがみられる。台風時に風圧が強い沿岸部でも、紀南の外洋に面した熊野灘沿岸では石垣や防風林が発達したが、紀州灘沿岸部では、アマヨケイタとセキイタの板囲いにより風雨に備えた。他方、紀伊山地では、低い石垣で屋敷の周囲を囲み、石垣と主屋、付属屋が各々、補完しあうように配置されて風への抵抗を少なくしてきた。さらに、家屋を強固にするために、屋根や開口部の建具を押さえる方法、破風下や軒先に板囲いを巡らす対策も施されてきた。

紀伊山地の板囲いは近世後期には存在し、紀中沿岸部では遅くとも大正時代初期には装備され、昭和20年代ま

での間に広く普及していたことが明らかになった。昭和20年代には近代的な材料が伝統的な防風雨装置に取り入れられ、改良が加えられるが、30年代以降には減退する。重層的に囲われていた防風雨装置が減退していく要因は、居室への採光や通風、圧迫感の除去といった住要求が根底にあるが、住要求を実現するための建築技術や素材などの開発、整備が行われたことによる。まず、外部開口部の建具の防水性、気密性の向上が図られ、風雨に対してより強い外壁材料や仕上げ方法の適用といった家屋の外構えが強化される。さらに、紀伊山地では妻壁が大きく露出しない屋根形態への変化、紀中沿岸部では防風雨装置に替わる小庇の発達とも相互に作用し合う。

その結果、紀伊山地の家屋では防風雨のための外部装置の必要性が、昭和20年代末期にはなくなる。紀中沿岸部の防風雨装置は段階的に、あるいは復層的な過程を経ながら変容、消滅していく。セキイタは新たな形に姿を変えながら平成時代以降も継承されていくが、災害時に家屋に装備する方法であり、日常的には外部への開放性を獲得する。

これらの地域における民家の近代化は、近代の建築材料や技術により、災害時の安全性を確保しながらも、近代化の指標である室内の明るさを獲得し、居住性の向

表6 主屋と防風雨装置の概要

No.	建築年代	階数	屋根形式/屋根材	防風雨装置	外壁材	板囲い、単位 cm	軒高、単位 cm	軒出、単位 cm
1	江戸時代末期	1	切妻/杉皮→杉 (昭和23年)	板壁	一部トタン張り	表側 450	234	80
2	江戸時代末期	1	切妻/杉皮→板瓦 (昭和22年)	板壁	表側 板	裏側 板	259	104
3	明治時代初期	1	切妻/杉皮→杉瓦→杉 (明治初期～昭和40年)	板壁	表側 板	裏側 板 39	278	100
4	明治時代	1	切妻/杉皮【作】→杉【作】 (昭和35年)	板壁	表側 板	裏側 板	225	100
5	明治時代	1	切妻/杉皮→瓦→杉【作】 (昭和45年)	板壁	一部トタン張り	無し	237	65
6	明治時代	1	切妻/杉皮→杉【作】 (昭和27年)	板壁	一部トタン張り	表側 板	昭和27年	65
7	明治時代後葉	1	切妻/杉皮【作】→杉【作】 (昭和55年頃)	板壁	トタン張り	表側 板	昭和60年頃	47
8	明治時代	1	切妻/杉皮【作】→杉【作】 (昭和45年)	板壁	トタン張り	表側 板	昭和45年	46
9	明治30年頃	1	切妻/板瓦	土壁	トタン張り	表側 板	昭和48年	48
10	明治34年	1	切妻/板瓦	土壁	一部トタン張り	表側 板	(平成2年)	53
11	明治時代後葉	1	切妻/板瓦	板壁	表側 板	裏側 板	313	80
12	明治時代(昭和20年(修築))	1	切妻/杉皮→杉 (昭和35年)	板壁	表側 板	裏側 板 26	275	100
13	明治時代末期から大正時代	2	入母屋/板瓦【小庇】	板壁	漆喰・土壁	漆喰・土壁	1階 295 2階 472	84
14	明治時代末期から大正時代	1	切妻/瓦→杉 (平成8年)	板壁	表側 板	裏側 板	200	97
15	大正時代初期	1	切妻/板瓦	板壁	トタン張り	表側 板	昭和54年	80
16	昭和29年	1	入母屋/板瓦【小庇】	土壁	無し	無し【板瓦・土壁張り】	298	64
17	昭和35年	1	入母屋/板瓦	土壁	無し	無し【板瓦・土壁張り】	290	91
18	昭和43年修築	1	切妻/板瓦【小庇】	土壁	表側 板	裏側 板	267	62
19	平成元年改築(昭和31年築)	2	切妻/板瓦【小庇】	土壁	無し	無し	1階 268 2階 285	75

No.1表6のNo.と対応し、同一家屋である。( )は改築時期

表7 開口部と防風雨装置

No.	建築年代	床上開口部建具	門受け	雨戸敷居排水溝
1	江戸時代末期	雨戸→ガラス戸・雨戸 (昭和50年)	昭和50年頃まで有	有
2	江戸時代末期	雨戸	有	有
3	明治時代初期	雨戸	有	有
4	明治時代	雨戸→ガラス戸・雨戸→ガラス戸・雨戸 (昭和55年)	昭和55年頃まで有	有
5	明治時代	雨戸→ガラス戸・雨戸 (昭和55年)	昭和55年頃まで有	有
6	明治時代	雨戸→ガラス戸・雨戸 (平成9年)	有	有
7	明治時代後葉	障子→ガラス戸・雨戸 (昭和45年)	有	無
8	明治時代	雨戸→ガラス戸・雨戸→ガラス戸・雨戸 (昭和60年頃)	昭和60年頃まで有	有
9	明治30年頃	雨戸→ガラス戸・雨戸 (昭和50年)	昭和50年頃まで有	有
10	明治34年	雨戸→ガラス戸・雨戸 (昭和50年)	無	有
11	明治時代後葉	雨戸→ガラス戸・雨戸 (昭和64年頃)	アビダシを立てた	有
12	明治時代(昭和20年(修築))	板戸→ガラス戸・雨戸 (平成4年)	有	有
13	明治時代末期から大正時代	ガラス戸・雨戸	無	無
14	明治時代末期から大正時代	雨戸→ガラス戸・雨戸	有	有
15	大正時代初期	雨戸→ガラス戸・雨戸 (昭和54年)	昭和54年頃まで有	有
16	昭和29年	ガラス戸・雨戸→ガラス戸・雨戸 (平成8年)	無	有
17	昭和35年	ガラス戸・雨戸	無	有
18	昭和43年修築	雨戸→ガラス戸・雨戸 (昭和50年)	無	有
19	平成元年改築(昭和31年築)	ガラス戸・雨戸	無	有

No.1表5のNo.と対応し、同一家屋である。( )は改築時期

上が図られたことにある。言い換えると、防風雨装置や屋敷構えから開放され、住まいが外部への開放性を獲得していく過程でもある。他方、気象条件を克服するために工夫されてきた防風雨装置は、民家の外観に表情豊かな地方性を造り出していったが、近代化により独特の景観は姿を消していくのである。

### 註および文献

- 1) 日高郡役所編纂：『日高郡誌上巻』、株式会社名著出版、pp.427～462、1970
- 2) 美浜町史編集委員会：『美浜町史上巻』、美浜町、pp.397～454、1988
- 3) 前掲2)『美浜町史上巻』、p.444
- 4) ①印南町史編集室：『印南町史通史編上巻』、第一法規出版株式会社、pp.59～60、1990  
②前掲2)『美浜町史上巻』、pp.443～454
- 5) 千森督子：「漁村の一例—釣漁聚落の場合—雑賀崎の住環境と住形式」、信愛紀要第21号、pp.66～72、1981
- 6) 調査家屋では「マエダレイタ」の名称が最も多く用いられているため、本論文ではマエダレイタと表記する。
- 7) ①野田三郎：『日本の民俗 30 和歌山』、第一法規出版株式会社、pp.51～55、1974  
②美浜町史編集委員会：『美浜町史下巻』、美浜町、pp.1090～1093、1991  
③川辺町編さん委員会：『川辺町史第二巻通史編下』、川辺町、p.878、1991  
④御坊市史編さん委員会：『御坊市史第二巻通史編Ⅱ』、御坊市、p.1067、1981
- 8) 米田藤博：「紀伊半島における防雨民家の分布と景観」、地理学報第3号、pp.1～15、1974
- 9) 御坊市以北では「セキイタ」の名称が一般的で、以南では「サシイタ」の名称が用いられているが、調査家屋では「セキイタ」の名称が多いために、本論文ではセキイタとする。
- 10) ①前掲7)①『日本の民俗 30和歌山』、p.53  
②前掲7)②『美浜町史下巻』、p.1091  
③前掲7)③『川辺町史第二巻通史編下』、pp.878～879
- 11) 前掲7)③『川辺町史第二巻通史編下』、pp.873～879
- 12) ①本多友常、河崎昌之、千森督子：「傾斜環境における変容の要因分析 1. 傾斜環境における景観変容の特質」、日本建築学会近畿支部研究報告集、pp.429～432、1999  
②千森督子、本多友常、河崎昌之：「傾斜環境における変容の要因分析 2. 路地空間の変容と特質」、日本建築学会近畿支部研究報告集、pp.433～436、1999  
③千森督子、本多友常：「傾斜環境における変容の要因分析 1. 雑賀崎の傾斜環境における屋根形式と構造の変容と特質」、日本建築学会近畿支部研究報告集、pp.447～448、1999
- 13) ①前掲7)②『美浜町史下巻』、p.1091  
②前掲7)④『御坊市史第二巻通史編Ⅱ』、p.1068
- 14) 杉本尚次：『近畿地方の民家』、明玄書房、pp.170～175、1969
- 15) 紀和町史編さん委員会：『紀和町史上巻』、紀和町教育委員会、p.39、1991
- 16) ①千森督子：「中紀地方の民家における雨除け板の変容に関する研究 マエダレイタとセキイタを中心にして」、民俗建築第112号、pp.80～89、1997  
②千森督子、米村敦子：「湊峡の民家—木津呂集落の屋敷構えと家屋形態」、民俗建築第124号、pp.23～30、2003
- 17) 印南町史編集室：『印南町史通史編下巻』、第一法規出版株式会社、p.1420、1990
- 18) 日高郡役所編：『日高郡誌下巻』、株式会社名著出版、pp.1334～1336、1970
- 19) 小山豊監修：『目でみる御坊・日高100年』、株式会社郷土出版社、p.57、1993
- 20) 前掲7)②『美浜町史下巻』、pp.1090～1091
- 21) 暁鐘成：『西国三十三所名所図会後編』、嘉永6年(1853)
- 22) 前掲15)『紀和町史上巻』、pp.110～113
- 23) 前掲8)「紀伊半島における防雨民家の分布と景観」、p.12

## 紀州民家の防風雨装置及び屋敷構えの特性と変容

千森 督子

**要旨：**紀州の民家は、自然風土条件でも台風による風雨や横殴りに吹き付ける降水への対策が施されてきた。紀中沿岸部では、アマヨケイタとセキイタの板囲いにより風雨に備えた。他方、紀伊山地では、低い石垣で屋敷の周囲を囲み、主屋は低く抑え、付属屋を周囲に配して建物相互で補完し合う屋敷形態がとられた。さらに、屋根や開口部の建具を装置で押さえる方法、破風下や軒先に板囲いを巡らす対策が施されてきた。紀伊山地の板囲いは、近世後期には存在し、紀中沿岸部の板囲いは遅くとも大正時代初期には装備され、いずれも、昭和20年代まで広く普及していたことが明らかになった。昭和20年代には伝統的な防風雨装置に近代的な材料が取り入れられ、改良されていくが、30年代以降になると減退していく。その要因として、外部開口部の建具材の防水性、気密性の向上、壁や家屋の外構えの強化、さらに、紀伊山地では妻壁が大きく露出しない屋根形態への変化、紀中沿岸部では防風雨装置に代わる小庇の発達が考えられる。その結果、地域特有の自然風土条件に対応するための外部装置の必要性がなくなる。